

夏秋どりトマト用台木の新品種 ‘TTM-127’

1 新しい品種の内容

(1) 背景・目的

夏秋トマトは青枯病をはじめとする土壌病害の発生により生産不安定となりやすく、耐病性台木の‘グリーンフォース’、‘ブロック’が用いられ、土壌病害多発ほ場ではより耐病性の強い‘グリーンガード’が用いられている。しかし、耐病性または収量性の観点から課題がある

そこで、複合耐病性を有する台木の中から、穂木品種‘りんか409’を対象に比較検討した結果、耐病性、収量性が安定した‘TTM-127’を有望品種として選定したので、その特性を紹介する。

(2) ‘TTM-127’の特性

- 1) 生育初期は‘グリーンフォース’‘ブロック’と同等以上で、中位段以降の草勢はやや弱まる傾向があるが、‘グリーンガード’より安定して強い。
- 2) 果実肥大は‘グリーンガード’より優れ、総収量及び上物換算収量は‘グリーンフォース’‘ブロック’と同等。
- 3) ‘グリーンフォース’‘ブロック’と同様に秀品率は高い。
- 4) 青枯病に対する耐病性は‘グリーンフォース’より明らかに強く、‘グリーンガード’よりやや強い。
- 5) ‘TTM-127’は穂木の草勢が強く多収が期待でき、安定した青枯病耐病性も有することから、慣行台木の代替品種として有望と考えられる。

2 試験成果の概要

(1) 2017年及び2018年の3月下旬に穂木及び台木をは種し、4月中旬にピン接ぎ法により接木を行い、5月下旬定植の夏秋どり作型において、‘TTM-127’の栽培特性を調査した。対照品種として‘グリーンフォース’、‘グリーンガード’及び‘ブロック’を供試し、穂木はいずれも‘りんか409’とした。施肥他の管理は日南町の栽培基準に準じた。

(2) 生育

定植時の苗は、2カ年とも‘グリーンガード’の台木径が最も細く、穂木径もやや細くなる傾向が見られた(データ省略)。また、段階別の茎径の推移においてもいずれの品種も5段以降で細くなるなか、‘TTM-127’の草勢は‘グリーンフォース’や‘ブロック’にはやや劣るものの‘グリーンガード’ほど顕著な草勢低下は認められなかった(図1)。着果は時期、品種により変動したが、総収穫果数に有意差は認められなかった(表1)。

(3) 収量、品質

総収量、上物10a換算収量等はいずれの年も有意差は認められなかった。‘TTM-127’は果実肥大が良好で‘グリーンフォース’、‘ブロック’と同等の収量で、秀品率も同等だった(表1、図2)。

(4) 根部調査

収穫終了後の根部掘取り調査において、‘グリーンフォース’及び‘TTM-127’は根域が広く細根の発生が良好で引き抜き抵抗も高かった(達観)。

(5) 青枯病耐病性

園芸試験場青枯病甚発生ほ場において‘グリーンフォース’(2017年)及び‘グリーンガード’との耐病性を比較した。その結果、‘グリーンフォース’と比較して初発が遅く発病度は低く抑えられた(図3)。「グリーンガード」の初発は‘TTM-127’と同時期であったが、発病の進展は‘TTM-127’がやや遅かった(図4)。なお、2015年試験で‘ブロック’は‘グリーンガード’より発病度が高かった(データ省略)。

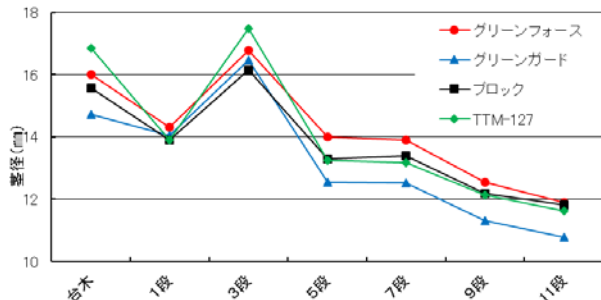


図1 段位別茎径の推移(2018年)

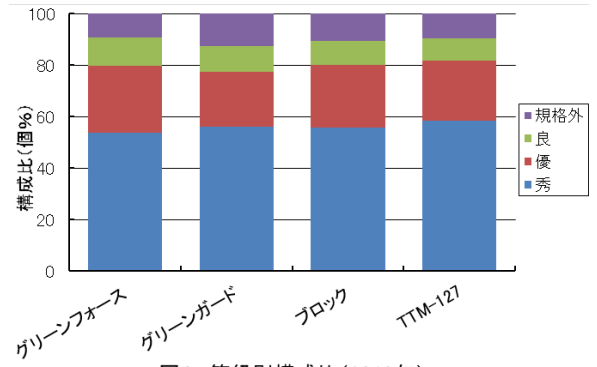


図2 等級別構成比(2018年)

表1 収量及び障害果の発生程度

品種名	総収量 (g/株)	総着果数 (個/株)	上物率 (%)	10a換算 収量(t)	障害果率(%)					
					変形	窓チャック	花落	尻腐	裂果	空洞
グリーンフォース	7455	36.4	90.7	16.0	27.9	1.7	6.4	0.0	9.2	2.4
グリーンガード	6989	35.6	87.4	14.7	24.8	2.0	7.0	0.6	7.5	0.4
ブロック	7376	36.3	89.4	15.8	25.1	1.9	6.5	0.3	8.8	1.8
TTM-127	7590	36.5	90.3	16.3	26.5	1.6	6.8	0.6	5.3	1.0
分散分析	ns	ns	ns	ns	*	ns	ns	ns	ns	ns

※上物率及び障害果率ともに総収穫個数に対する割合

※障害果率は重複を含む

※分散分析: *は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし

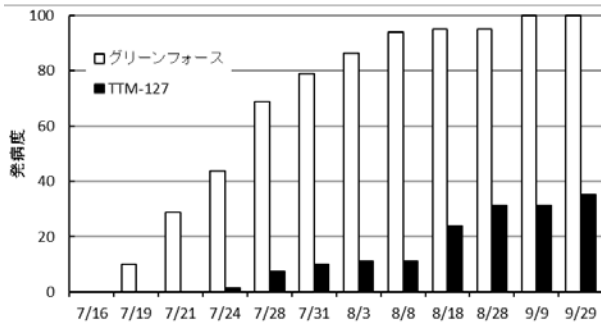


図3 トマト青枯病の発病推移(2017年) 穂木:りんか409

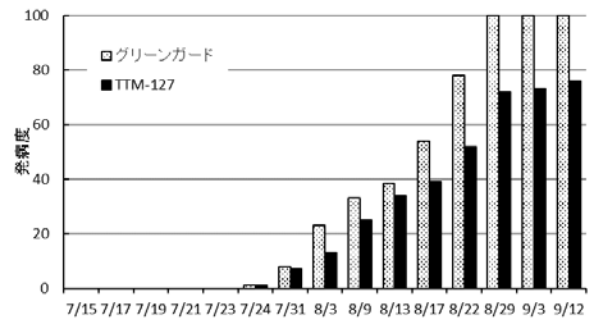


図4 トマト青枯病の発病推移(2018年) 穂木:サンチェリービュア

3 普及の対象及び注意事項

(1) 普及の対象

中山間地域の夏秋どりトマト産地

(2) 注意事項

- 1) ‘りんか409’を穂木とする場合、‘TTM-127’を2～3日早まきをすることで接木時の苗の生育が揃う。
- 2) 青枯病常発ほ場においては土壌消毒の併用が望ましい。
- 3) 対象地域以外での利用については事前に栽培試験を実施して適応性を判断する。
- 4) ‘TTM-127’は青枯病の他、TMV (Tm-2a)、褐色根腐病、根腐萎凋病、萎凋病(レース1～3)、半身萎凋病(レース1及び2)及びネマトーダに対する複合耐病性を持つ(メーカー資料より引用)。

4 試験担当者

日南試験地	試験地長	龜田修二*1	環境研究室	主任研究員	田中陽子
	研究員	前田真吾		研究員	松村和洋
	研究員	吉田伊織*2			

*1 現日野振興センター日野農業改良普及所

*2 現とっとり農業戦略課研究・普及推進室